

もう家具を買わせない!「家具工房旅する木」

家具工房旅する木 須田修司

URL <http://tabisuruki.com/>



はじめに

国道275号を札幌方向に向かい当別町の北海道医療大学前信号を左折すると、田んぼに囲まれたのどかな風景の中に旧東裏小学校があります。この小学校が廃校になったのが2008年3月で、同年にこの廃校を利用して須田さんが家具工房を開きました。須田さんは、ここに来る前まで札幌市東区で元玉葱倉庫を利用して工房を開いていましたが、縁があり今は現在地で家具づくりに励んでいます。

本当に家具づくりが好き、木が好きな須田さんにお話しを伺いました。



(冬の「家具工房旅する木」(旧東裏小学校))

須田修司はこういう人ですと自己PRしていただけですか

私は1969年に長野県で生まれ、幼少期は友達もつくりらず、ひたすら積み木で遊んでいたようです。その後は「北の国から」に夢中になり、新潟大学工学部電気工学科時代は暇さえあれば北海道へカヤックついで一人旅、北海道中の川下りをしていました。これは今でも続いています。

その後、ログハウスの勉強をしにカナダへ遊学、1992年にオリンパス光学工業(株)カメラ開発部入社、1997年北海道立旭川高等技術専門学院造形デザイン科入学、1級家具手加工技能士取得、2級建築士も取

得しています。2004年藤田工務店入社、2005年に「家具工房旅する木」を札幌市で設立し、2008年に現在の当別町旧東裏小学校に工房を移転しました。また、2011年に化学物質過敏症のための家具ブランド「心と体と木と暮らし」を設立しています。



(「家具工房旅する木」正面)

「家具工房旅する木」の旅立ちと廃校との出会いは色々ドラマがあるように感じますが

「家具工房旅する木」は、実現させたい幾つかの夢を掲げてスタートしましたが、その玉葱倉庫では限界を感じていました。しかし、望むような施設と設備を自分で建て、揃えるのはいつのことになるやらと思っていました。それでもいつかは夢を叶えるため、今はコツコツと、一つ一つ良い仕事をして行くしかない。その積み重ねの先に何かが見えてくると信じてやってきました。

そのような時に、「廃校なんてどう?」という妻の言葉に動かされ、札幌とその近郊の廃校を探している時、すぐ隣町の当別町に廃校予定の小学校があるということから見に来ました。そこで関係者の方々に熱い思いをぶつけたところ、その小学校を遙か昔に卒業された地元の方々が熱心に協力してくれて、ありがたいことにこの小学校を工房にすることを決めることができました。



(「旅する木」の看板、カフェもあります)

「家具工房旅する木」はどのような想いで始めようとしたのですか

改めて、私が最初に札幌で家具工房を開くに当たって、どのような考えで始めたかを少し述べさせていただきます。

工房を開くには資金がないので、銀行や信金等からお金を借りなければなりませんが、家具工房には無理だと言われました。そこで、担保無しでも計画書を見せて納得してもらえば何とかなるとの思いから、次のような考え方で熱心に練り上げて作りました。

その計画はどこにもない家具工房を作るというものでした。その中身ですが、①こだわった家具づくり②木工教室という2本柱です。そのコンセプトは、まず、レベルの高い木工教室については、楽しいよりも、苦労を味わっていただきたいということです。苦労して作り上げたものは、長い間愛着が湧いてきます。次に本格的な子供の木育をする。おもちゃ製品も遊び方もそうです。実は、私は北海道の木育マイスター制度作りに関わっています。そして、カフェは安全な食材を利用して皆さんに提供したいと考えています。ようするに、「遊びに来れる家具屋」をつくる。と言う計画書を出して住宅金融公庫から資金を借りることができ、札幌で工房を設立しました。

その後は、先に話したように工房施設を作るのはお金がかかるから無理ということで廃校を探しました。今思うとこの小学校には縁があったんだと思います。探して一発目でこの小学校に巡り会えました。家賃も相場並ですし、本当に今は感謝しています。

「旅する木」は家族と、家族同然の3名のスタッフで協力し、助け合いながらやっている小さい工房です。だからこそ手づくりで、手間暇を惜しまない本物

のモノづくりが出来るのだと思います。イメージとしてはグループ的に楽しくやっています。



(カフェ内の様子、須田さん手作りの立派な家具)

廃校というのは、地元の人の思い入れがあります。私は“使わせていただいている”というスタンスでやっています。地域の人たちは冬に除雪をしてくれたり、非常に良くしてくれています。私も地元の育成会や町内会に入っています。地域との交流を深めています。地元の人は、ほっとけばお化け屋敷になるが、利用してくれているのでありがたいと言ってくれていますので、本当に嬉しいことです。

廃校のメリットとデメリットを考えると、家具づくりをするにはメリットばかりです。ただ一点のデメリットは、「寒い！」ということでしょうか、雪が多くて寒いですが、農家の方々が除雪してくれます。本当に良好な関係を築いています。



(工房内様子、ここで生まれる「旅する木」の家具)

実はこの廃校とは運命的な出会いがあります。この東裏地区は亜麻の産地で、7~8年前に復活した亜麻復活の拠点なんです。日本全体の70%を生産しています。なぜ運命的かというと、亜麻仁油は家具の塗

装に用いるオイルの主成分なんです。しかし、乾きが遅いので乾燥促進材として有機物質が入っています。ようするに市販のオイルは決して安全とは限りませんが、一般的な家具屋、木工の専門家は使っているはずです。現状ではこのような感じです。そのようなことで、私はこの当別町東裏地区での亜麻栽培に衝撃を受けました。

亜麻は、搾りかすを廃棄していました。そこで、これを木材乾燥用に試験的に使いました。これが実に良いことだと分かり、改良を重ねて乾燥促進材として企業秘密ですが完成させました。これは「世界一安全なオイルです」と自負しています。このオイルを塗り2週間保管して出荷しますが、廃校なので保管庫スペースもありますので便利です。このように亜麻とは偶然の出会いがあり、これを理解してくれているお客様にのみ販売しています。



(工房内の家具展示の様子)

失礼ながら面白いネーミングの「旅する木」ですが、由来を教えていただけますか

社名の候補は色々ありましたが、その中でも最高のものを選んだと誇りに思っています。

私はアラスカの写真家星野道夫の写真と物語が大好きで、ご存じの方も多いと思いますが、星野さんの本「旅をする木」の中に、鳥がついばみながら落してしまう幸運なトウヒの種子の、果てしない旅の物語があるのです。様々な偶然を経て川沿いに根付いたトウヒの種子は、やがて大木に成長し、森の動物たちに様々な恵みを分け与える。川の浸食は少しづつ森を削ってゆき、やがてその木が川岸に立つ。ある雪解けの洪水にさらわれた大木はユーコン川を旅しながら小鳥たちの休憩場所となり、ついにはベーリング海へと

運ばれ、北極海流によりツンドラ地帯の海岸へとたどり着く。木のないツンドラの世界で一つのランドマークとなり、一匹のキタキツネがテリトリーの匂いを付ける場所となる・・・。一本のトウヒの木の果てしない旅の物語。種子から始まり様々に姿形を変えながらも必ず何かの役に立っている木。

色々な旅をし、めぐり巡って僕のところへやって来た木を大切に家具という形に変え、お客様の元へ旅立って欲しい。このような気持ちを込めて「旅する木」を社名にしようと思ったのです。



(社名由来の「旅をする木」本を置いた家具)

これからは何を、どのようなことをしようとしていますか

家具だけでなく、生活をプロデュースしたいと考えています。それには、家づくりを含めて家具、クラフトを提案していくということになります。ようするに、生活そのものを提案します。将来は私がすべてつくります。工務店と連携しながら家を造り、そして家具をつくり、生活そのものの提案です。その提案スタイルは、この旧東裏小学校の近くに「一区画をつくり、そこに集まって暮らす」スタイルです。そこには、色々な職業の人たちが集まって来てコミュニティを形成し、楽しく暮らしたいと望んでいます。

家具づくりにこだわりの樹種はあるのですか

私自身は樹種にこだわりはないんです。客からはこだわりの樹種での注文はあります。私はどの樹種でも絶対これは良いとは言えないと考えていますので、お客様

には求めに応じて樹種のアドバイスはしています。

家具には一般的にナラやタモが使われますが、道産材、外材を含めてですが年々最近は品質が悪くなっているように感じます。



(「旅する木」のナラやタモを用いた展示家具)

木工の理念をお聞かせ願えますか

長く使えるモノを作らなければならぬと考えています。以前は伐採に対して抵抗はありました。今は、その成長した木に感謝しつつその木への恩返しと思い相応しい家具をつくっています。

お客様に対し私は家具を「死ぬまで買い変わせない」という考え方でやっていますが、それはどのようなことかというと、私のつくった家具一つで良いということです。例えば、テーブルであれば私のつくったテーブル一つを死ぬまで使っていただく。ほかからテーブルは買わせないということです。そう思えるような納得できるものを提供します。それはデザインと機能を両立させた家具なんです。「デザインと機能」このような理念を持って家具づくりを進めています。



(「旅する木」の家具はデザインと機能の両立)

これからの家具づくりをどのように考えますか

納得できるものを提供したい気持ちを持っています。

今後の展開を考えたときには、針葉樹の家具もやはり考えなければという想いはあります。しかしながら、針葉樹で作るのはとても難しいことです。デザインと針葉樹は今までの家具では結びつかないと思っていますので、まったく別のブランドでつくるのが良いのか考えています。



(「旅する木」の重厚感ある家具)

今後ともお客様の納得するもの、自信を持って提供できる家具をつくりたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

(文責：北海道林産技術普及協会 植杉雅幸)